

2011年12月26日 発行

市史だより

F u k u o k a

14

史的再発見マガジン
[シシダヨリ・フクオカ]

Autumn/Winter 2011

TAKE FREE

特集

歴史の郷 柏原を行く。

連載コラム「歴・史・万・華・鏡」 ● 連載コラム「福岡市史への歩み」
部会だより（考古・古代・中世・近世・近現代・民俗）



Special Feature

晴れた日には福岡市を一望できる閑静な住宅地として知られる柏原ですが、樋井川上流域にあたるこの付近の標高は四〇メートル程度です。丘陵でも高い所で八〇メートルと、高さはさほどでもないのですが、宅地化される前の地形図を見ると「山間」のイメージを抱きます。北部に広がる平野から樋井川を遡ると、このあたりで急に上り坂が増えることと、細い尾根と狭い谷が連続することが、標高以上に「山間」を感じさせるのでしょう。

昭和五十年代に行われた柏原地区の発掘調査では、丘陵地から旧石器時代の道具や、六〇〇〇〜一万年前の市内で最古級の縄文時代の集落跡が見つかりました。見つかったたくさんの縄文土器は、八〇〇〇〜九〇〇〇年前の北部九州において、土器の形がどのように変化したかを示す大変貴重な発見で、多くの考古学者の注目を浴びています。

● 樋井川上流の古墳

さて、時は流れて六世紀後半頃、柏原の北側の丘陵では大平寺古墳群が、南側の山際ではそれぞれの尾根にたくさん古墳が造られます(柏原古墳群)。大平寺古墳群は比較的標高の低い北側エリアにあり、樋井川上流を見守る位置として好立地ですが、調

査が行われていないので、詳しいことはわかっていません。一方、柏原地区の古墳群は発掘調査によって、円墳のほかに前方後円墳や五角形の古墳が造られたことがわかりました。中でもしつかりとした造りの石室を持つ古墳からは、刀や弓矢などの武器、耳飾りや首飾りなどの装飾品と、乗馬用の馬具が見つかりました。豊富な副葬品は、この付近において影響力を持った人物の墓であることを物語っています。

古墳は、葬られた人が生前活動した場所を見渡せるところに造られます。これらの古墳に葬られた人びとは、なぜこの樋井川上流域を活動の場に選んだのでしょうか。

● 鉄作りと山守

柏原小学校の近くで古代の遺跡が見つかっています。大平寺古墳群の南側斜面にあたる場所で丘陵をカットして平坦面を造り、建物を建てていました。当時木々に覆われていたであろうこの場所にどうしてと思いますが、敷地内で鉄の製錬や鍛冶が行われていたことが疑問を解くヒントになりそうです。鉄製品を作るには、原料の採集・運搬や製錬・鍛冶だけでなく、これにともなう大量の燃料が必要です。山林を管理・保全したうえで、木を伐採・運搬し、炭に

加工する人びとも不可欠でした。油山の東斜面と片繩山の北斜面が接するこの一帯は、木炭を調達するには便利な場所だったことでしょう。

それをうかがえるものがあります。この遺跡からは「山守家」と書いた九世紀頃の土器が見つかっています。「家」の文字はしばしば土器に記され、多くは建物の位置や氏族名をとまいません。「山守」は山林管理に関する職名、もしくはそれにまつわる氏族名でしょう。いずれにせよ、この立地は山を意識したものと考えて良さそうです。古代氏族の山部と鉄生産が密接に関わることが指摘されてはいたものの、直接、製鉄遺構にもなつて山の管理を示す文字資料が確認されたのは大変まれな例です。

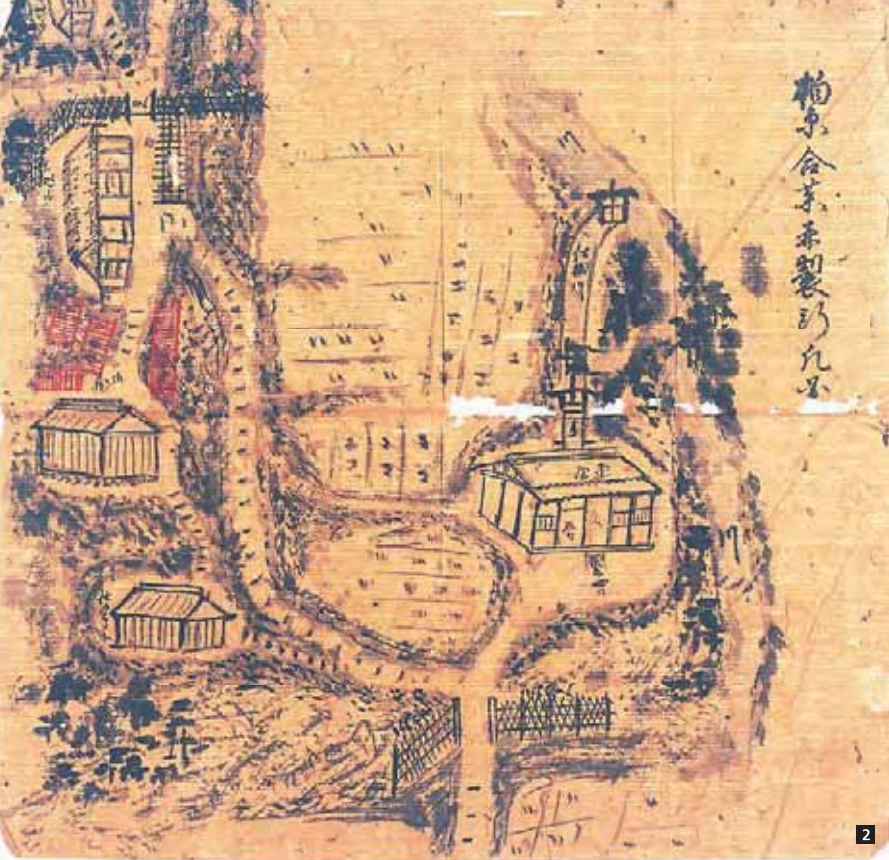
敷地内での活動は六世紀後半から十世紀頃に及んでおり、出土した硯・石帯(ベルトの飾り)・「郷長」と書いた土器からは、奈良時代から平安時代にかけてここに役人が出入りしていたことがわかります。この頃、公的な場所だったことは間違いないでしょう。

奈良時代より前の様子はよくわかりませんが、最初の建物は六世紀後半頃のもので、桁行一八・五メートル×梁行五・八メートル、一方に庇がついていました。付近には朝廷

アクセスマップ



- 1 五社神社(福岡市南区松原2-24-20)
【西鉄/バス】「自動車免許試験場前」停留所下車、徒歩10分。
- 2 大平寺古墳群(福岡市南区大平寺1-93-1ほか 大平寺緑地保全地区内)
【西鉄/バス】「大平寺」停留所下車、徒歩10分。
- 3 羽黒神社(福岡市南区柏原字林崎372)
【西鉄/バス】「團雲公園」停留所下車、徒歩5分。
- 4 埴安神社(福岡市南区柏原4-20-41/駐車場あり)
【西鉄/バス】「大城戸」停留所下車、徒歩5分。
- 5 西鉄バス「柏原営業所」(福岡市南区柏原6-478)
【西鉄/バス】・西鉄天神大牟田線「高宮駅」から52番系統▶「柏原営業所」行き
・天神地区から51・52・56・57・59・151・152番系統▶「柏原営業所」行き



1 古代～中世の主な遺跡(昭和34年地形図を基に作成) 2 柏原合衆再製所凡図(林(美)文書) 3 縄文時代の集落跡から見つかった炉跡 4 1万年前頃の縄文土器
 5 前方後円墳の石室入口付近では、当時のまま土器がのこされていた 6 9世紀頃の須恵器の皿。底部外面に「山守家」と書かれている
 7 渋谷定円(重基)讓状(入来院家文書)。貞和2(1346)年、渋谷定円(重基)から養子の重勝へ譲られた所領のなかに、柏原村の名前が見える

と関わりのある者がいたようです。建物の敷地のそばに残る小字「山ノ口」から山に登った所に造られた前方後円墳の時期が、最初の建物と同じ六世紀後半頃であることが、それを示唆しています。

六〜七世紀頃、朝廷の山林の保全・資源の供給にあたった氏族に山守部やまもりべがいます。そしてこの山守部を統率したのが、製鉄との関わりを指摘される山部です。「山守家」が山守部の何らかのなごりとすれば、磐井の乱を経た六世紀後半頃、朝廷が安定的に燃料を確保するために、この近隣の山林の占有をはかった可能性も考えられるでしょう。その場合、製鉄という生産活動を通して、生産の各場面に関わる人びとの支配を進めていく朝廷の姿が浮かんできます。

●「公」から「私」へ

一般的に、朝廷が山林の統制をしなくなつた十世紀以降は山の私有化が進んでいきます。その影響を受け、柏原一帯も性格を変えていったものと想像されます。

二度の蒙古襲来によって鎌倉幕府は戦功を立てた御家人への恩賞の捻出に苦慮することになり、さまざまな土地が御家人に与えられました。柏原もその際に配分された土地のひとつでした。『入来院家文書』や『称寝文書』などには、「松本」「林崎」などの現在も柏原に字名として残っている地名が記されています。このうち「林崎」は古

特集

歴史の郷 柏原さとを行く。かし はら



代に製鉄を行っていた場所ですが、これらは主に田地として配分されています。また、羽黒神社南側の発掘調査では、古文書に記されている田地や居館跡が確認されており、その内容を裏付けています。

「柏原」という地名が初めて史料に登場するのは、南北朝時代になってのことで、この頃には柏原村が成立していたようです。古代から中世にかけて、柏原の土地の性格が大きく変容したことがうかがえます。

● 藩の火薬工場

江戸時代において柏原には合葉（火薬）再製所が、すぐそばの屋形原には合葉製造所が設けられました。製造所は文字どおり鉄砲や大砲に使用する火薬を製造した施設ですが、再製所は使えなくなった火薬を再度調製して使用できるようにする施設です。

「旧福岡藩事蹟談話会記事」（『筑紫史談』第二五集）には、旧福岡藩士で合葉の製造に携わった湯浅亨の談話が載せられています。それによると柏原、屋形原には、事務所・倉庫・製造所・煮込所・定番宅・水車の諸施設が設けられたそうです。

当初合葉の再製・製造は柏原の合葉再製所で行われていました。幕末になると長崎での警備規模が増大し、安政期には洋式銃

を購入し、それにもなつて西洋軍法の訓練を行うようになります。また、文久期には海岸防備のために台場が築かれ大砲が設置されました。その結果、需要が増加し、合葉の製造は急務となりました。そのため文久三（一八六三）年九月、屋形原に合葉製造所が設けられました。

合葉の再製、製造に携わった職工は柏原で五六名、屋形原では八九名にのぼったそうです。屋形原で製造された合葉は元治元（一八六四）年から明治三（一八七〇）年までの七年間だけでおよそ五〇万斤余（三〇〇トン超）とありますので、かなりの規模で合葉の製造が行われていたことがわかります。

● 発展する都市のなかで

明治期の柏原は、江戸時代以来の集落を中心とした農村地帯であったと考えられます。柏原は古くから早良郡に属し、福岡市が発足した明治二十二年には早良郡樋井川村に編成されます。『早良郡誌』によると、樋井川村は農家の割合が多く、明治・大正期から区画整理が行われており、米作に力を入れていました。農村は都市部から糞尿を肥料として調達する一方で、「くみとり米」を納める習慣があり、樋井川村も都市部と関わりの深い地域でした。

ひとくちコラム

柏原の庚申ストーリー



壱安神社周辺の史跡【図：上】
十三仏【写真：左下】
庚申塔【写真：右下】

柏原の石碑・祠などの史跡をたずねてみると、ある一定の地域内によくも集まっていることに気づきます。旧柏原村の村社だった壱安神社の周辺（柏原1丁目・4丁目）に、6基の庚申塔のほか、観音堂、地藏堂、十三仏が祭られているのです。

明治時代の地図などを参照すると、これらの史跡が残る場所は、旧柏原村の民家が建っていた地域と重なり、その周辺はほとんどが田畑でした。神仏は集落の近くに建てられ、おそらく近所同士でそれぞれ世話していたのでしょう。

また、西鉄バスの停留所「大城戸」から「古野」に至る通りは当時は存在せず、すぐ南を並走する小路に庚申塔が並ぶことから、昔はこちらが村の中心となる通りだったことがわかります。庚申塔は古いものでは安永2（1773）年と刻まれており、江戸時代から庚申信仰が盛んだったことも伝えています。

区画整理によって住宅地となった現在の柏原からは、かつての姿は想像しにくいものですが、路傍の史跡をたどることで、昔の村のありようが浮かび上がってきます。



花畑ハイツ



花畑ハイツ

柏陵高校



▲ 羽黒神社【写真:上】
柏原公民館では、地域の歴史についての講座が開かれている【写真:下】

花畑ハイツ

柏陵高校



柏原周辺の変遷

上から：昭和53年→昭和63年→平成23年 現在

大正後期になると、福岡市は港湾都市、商工都市として発展するために周辺町村を加えた都市計画を検討するようになります。そのなかで柏原・松原・長尾が属する樋井川村も昭和四（一九二九）年に福岡市へ編入されました。柏原に隣接する屋形原、若久などの那珂郡八幡村は大正十五（一九二六）年に編入されており、この一帯はほぼ同時に福岡市に属するようになりました。昭和三十年代以降、都市に人口が集中したため、福岡でも住宅の不足が課題となり、公営住宅が郊外に建設されるようになります。さらに自家用車の普及で交通が発達したため、住宅地が一層郊外へ拡大します。次第に柏原周辺でも耕地と宅地が混在してくるようになります。

そこで住宅環境を整備するために、昭和五十四年には柏原で区画整理事業が始まります。事業においては公園緑地の確保に配慮がなされ、自然豊かな住宅地を形成する基となりました。今日でも山麓の斜面を切り開いて住宅が建設され、ベッドタウンの開発が進んでいます。

住宅地の拡大は思わぬ効果を柏原にもたらしました。区画整理事業にあわせて行われた発掘調査によって、貴重な考古遺物が出土します。柏原は福岡の歴史を考える上で重要な場所となりました。現在では、地域の人々を中心に、都市発展を契機とする歴史の再発見と共有の試みが行われています。

筑前の狛犬はシロ、筑後の狛犬はクロ



▲五社神社の狛犬【左】：浮羽産の黒い凝灰岩で造られている
▲平尾天満宮の狛犬【右】：白い花崗岩で造られている
※平尾天満宮（福岡市中央区）

南区松原二丁目の五社神社の拝殿前にある石造狛犬（像高六〇センチメートル）は、福岡市内ではほとんど見かけない黒っぽい狛犬です。台座を見ますと、そこには昭和五（一九三〇）年に浮羽郡大石村（現在のうきは市浮羽町大石）の石工の石井佐平が造ったと刻まれています。大石村は『太宰管内志』の筑後生葉郡の項に、その名のとおり石の多いところと書いてあります。その石は黒い阿蘇溶結凝灰岩で、他に同じ浮羽の山北あるいは八女の長野が産地として知られています。大石村といえは、延宝二（一六七四）年に五人の庄屋が農民のために身代をなげうって筑後川に大石堰を築いて、灌漑農業に貢献したという五庄屋物語が有名です。また大石村の石工が造った古いものでは、宝暦三（一七五三）年に秦宗助が造った久留米の櫛原八幡宮の手洗盤があります。このように大石村の石材は筑後川の灌漑用材として、あるいは筑後地方の杜寺の石造物に使われました。

これに対し筑前の狛犬や鳥居は白いです。江戸時代なかばの『筑前国統風土記附録』に怡土郡、志摩郡、早良郡では白い良質の石が採れ、それを加工する良い石工が福岡・博多のあちこちにいたと書かれています。したがって、福岡市内の杜寺には白い花崗岩で造られた鳥居や狛犬が多いのです。ところが大正時代の頃から大石村の石工に、久留米や田主丸の植木業者から庭を飾る石燈籠などの注文が増え、黒い凝灰岩の石造物が筑後以外にも広まったといわれています。五社神社の場合も奉納者が、庭木の剪定で来ていた植木屋の仲介で黒い狛犬を奉納したのではないかと想像されます。福岡県の北と南、筑前と筑後とでは石材の違いで石造物の色が違うということにお気づきでしたか？

歴・史・万・華・鏡

テキスト・田鍋 隆男

◎ 福岡市史講演会が開催されました ◎

10月29日(土)午後2時から、中央区天神のエルガーホールで第7回福岡市史講演会が開催されました。当日は、あいにくの天気にもかかわらず、多くの皆さまに会場に足を運んでいただき、満員御礼の熱気溢れる講演会となりました。

「九州と東アジア——^{しんがいかくめい}辛亥革命の衝撃」と題した今回は、カナダのトロントからジョシュア・フォーゲル先生をお招きし、福岡市史編集委員会の委員長である有馬学先生とともに、辛亥革命に至る歴史の中で繰り広げられた九州と東アジアの浅からぬ関係について、じっくりお話しいただきました。

この講演会は、国際シンポジウム「辛亥革命と東アジア」(主催:東アジア近代史学会・福岡ユネスコ協会)の一環をなすものでもありました。そのため当日は、日本のみならず中国、台湾、韓国からも研究者が参加され、福岡の多くの聴衆とともにお二人の話に耳を傾けられていました。



ジョシュア・フォーゲル先生

ヨーク大学教授
【中国近現代史・日中関係史】



有馬 学先生

九州大学名誉教授
【日本近現代史】

前半お話しいただいたフォーゲル先生は、^{みやざきとてん}「宮崎滔天と辛亥革命」と題し、熊本出身の革命家・宮崎滔天の自叙伝『三十三年の夢』を手がかりに、ひとりの日本人がどのように中国の革命運動に関わり、何をなそうとしたのか、滔天の人となりにまで至る広い目配りの中でその足跡をたどっていただきました。随所にユーモアを交えた、流暢な日本語での講演は、聴く者に新鮮な感動を与えてくれたことと思います。

後半は有馬先生に「辛亥革命後の『日支親善』論——^{なかのせいごう}第一次大戦期の中野正剛と^{やすかわけいいちろう}安川敬一郎——」と題してご講演いただきました。ジャーナリスト出身の中野正剛、財界出身の安川敬一郎という福岡出身の二人の政治家が、共同して辛亥革命後の対中国政策と、それを可能とする国内政治体制について構想していたことを、丹念に史料を読みながら解き明かしていく内容は、これまであまり知られてこなかった歴史の一面を知る恰好の機会となりました。そして、こうした地道な研究の中から新たな発見があることを、あらためて示していただいた感じがします。

いずれの講演も、随所に専門的な内容が含まれていましたが、ご参加の方々には最後まで熱心にお聴きいただきました。厚くお礼申し上げます。今後も、皆様に「良い講演会だった」といっていただけるような企画をお届けしたいと思います。

◎ 『新修 福岡市史』を販売しています ◎



資料編 考古3 遺物からみた福岡の歴史

【A4判 上製本(函入り) 780頁】 頒価 5,000円

板付遺跡などの未公開資料や福岡市外に流出した考古資料の全貌を明らかにする。また、動物骨など自然遺物から、人間と自然の関わりを福岡の歴史として再現。



資料編 中世1 市内所在文書

【A5判 上製本(函入り) 1,350頁】 頒価 5,000円

古文書を中心に、福岡市内にある中世文書を一挙に収録。市史研究の基本文献となる一冊。附録に「別冊 花押集」と実物大「聖福寺古図」付き。



資料編 近世1 領主と藩政

【A5判 上製本(函入り) 1,000頁】 頒価 5,000円

豊臣期の筑前国・名島領に関する史料、福岡藩主黒田家に関する史料、幕府と福岡藩の関係を示す史料、福岡藩政に関する史料を収録。



特別編 福の民 —暮らしのなかに技がある—

【A4判 ソフトカバー 330頁】 頒価 1,800円

職場で、家庭で、学校で、地域で、わたしたちは無意識に「技」を使っている。暮らしの技にまつわる話を、福岡のひとびとの写真と聞き書きで描き出す群像絵巻。

お知らせ

ご購入

▶ 福岡市博物館ミュージアムショップ

福岡市早良区百道浜3-1-1
FAX : 092-823-2800

※ 平成24年4月2日までは博物館休館のため、FAXにてご注文を承ります。

▶ 福岡市情報プラザ

福岡市中央区天神1-8-1 福岡市役所1階
電話 : 092-733-5333

▶ ジュンク堂書店福岡店

福岡市中央区天神1-10-13 メディアモール天神1~4F
電話 : 092-738-3322

お問い合わせ

▶ 福岡市博物館 市史編さん室

福岡市早良区百道浜3丁目1-1
電話 : 092-845-5245

考 古

波の荒い玄界灘、穏やかな風景を湛える博多湾、海は福岡の生活と共にあります。しかし長い歴史をたどると、私たちが知っている海の顔は、ほんの一面でしかありません。地球規模の寒冷化によって博多湾が陸地になったり、温暖化によって現在より内陸側に海が入り込んだりと、その動きはダイナミック。人はその変化に応じて、営みの場や形を変えてきました。

自然が人に変化を与える一方、人もまた環境を変えていきます。人が環境を変えるにはその時代の理由がありました。

平成二十五年刊行予定の『特別編集環境の変遷と福岡の歴史(仮)』は、福岡の地質・自然環境と、環境の変化をテーマに編集を進めています。

古 代

福岡市域で出土した木簡の調査が続いています。一点ごとに実物をじっくりと観察し、出土間もない頃の写真や赤外線映像とも比べながら文字を読み取り、またその内容や、形状・加工の痕跡などから、使用された状況についても検討を重ねています。市域で出土した木簡のうち、墨痕があり、文字が読める状態のものは約一〇〇点ほどありますが、そのほとんどについてこのような調査を終えました。今後は土器に書かれた文字についても、同様の調査を積み重ねる予定です。木簡・墨書土器などの出土文字資料を丁寧に調査することで、文献資料だけではわからなかった市域の歴史を描くことができるものと考えています。

中 世

『資料編 中世2』の刊行に向けて、日々作業を続けています。これまで数多くの史料を収集し、現在も収集を続けていますが、紙幅の問題もあるのでそれらのすべてを収録できるわけではありません。そのため、収録史料の選定を行う必要があります。収集した史料の中からあらためて収録の採否を決めるのですが、どれも市史に必要と考えて収集した史料ですので、そう簡単には判断できません。史料の様々な要素を検討した上での決定となりますが、残念ながら収録を見送ることになります。貴重な史的財産であることに変わりはないのです。もうしばらく頭を悩ます作業が続くそうです。

近 世

平成二十六年に『資料編 近世2』を刊行予定です。この巻は家臣団関係の史料を収録します。一口に家臣団関係史料といっても多種多様です。

福岡藩は五十二万石余の石高を有していましたので、その石高に見合った多数の家臣を召し抱えていました。その数を考えると現存している史料は少ないといえるかもしれませんが、それら現存するものの中から選んで、史料集として一冊にまとめていくのは非常に難しい作業です。刊行までに残された時間はそう多くはありませんので、今後選定作業を鋭意進めていきます。

近 現 代

『資料編 近現代1』の編集もいよいよ大詰めになっていきますが、一方で近現代専門部会は『特別編集福岡城(仮)』の編集にも携わっています。

なかでも、福岡城域にあった施設の写真情報について、執筆者と協力しながら、収集を進めています。九州医療センター・同附属看護助産学校(旧福岡中央病院・同附属看護助産学校)、福岡大学(旧福岡商科大学・福岡外事専門学校)をはじめ、徐々に資料が集まりつつあるところです。

前号部会だより(近世専門部会)において、読者の皆さんに写真情報のご提供を呼びかけておりますが、今後も引き続きお待ちしております。

民 俗

福岡の町を歩いていると、地蔵を祭った小堂や、稻荷神の祠、史跡を示した石碑、過去の催事の記念碑など、さまざまなものを路傍に見つけることができます。調べてみると、思いがけず古い由緒やエピソードを持つものも少なくなく、福岡の歴史の豊かさをあらためて感じさせてくれます。また、由来が明らかでなくとも、小祠・小堂などは近所の方が輪番で掃除をしていたり、決まった日にお祭りが行われていたりします。こうしてさりげない形で地域に溶け込んでいるものたちは、町の歴史と現在の暮らしが地続きであることを物語ってくれる、貴重な証人ともいえそうです。

平成二十四年刊行の『民俗編 春夏秋冬・起居往来』では、「起居往来」の部として、福岡部・博多部の寺社・小祠・石碑・モニュメントなどを取り上げます。

● 旧版「福岡市史」の編纂始まる

4代目の市史編纂を委嘱された小野有耶介は、就任早々編纂の構想を発表し、積極的な活動を始めます。直後には編纂委員会委員を決定し、助役を委員長に、委員は市の幹部10名ほどが組み込まれ、さらに学識経験者9名を含む委員会顧問を任命しました。そして約半年後の昭和26(1951)年7月、福岡市史編纂委員会を開催するところまでこぎつけますが、「予算捻出不可能」という理由で、無期延期を告げられます。そこで小野は編纂委員長宛に「市史編纂に関する上申書」を提出しました。これが先回までにお話した大まかな経過です。

市史編纂の記録はここでストップしています。実際には作成されていたのですが、残念ながら所在が不明で、まだ見る事ができません。そのような編纂事業が劇的に動き出すのは昭和31年になってからです。

昭和31年6月6日、新たに編纂委員会が招集されました。委員長は助役で、委員は収入役・総務部長・税務部長・議会事務局長・教育長・教育研究所長ら市の幹部9名で構成されています。先回と異なるのは、学識経験者が一人も任用されていないことです。何がきっかけとなったのかは不明ですが、5年間の雌伏期間において、突然動き始めたのです。この会議の様子は手書きの議事録風な要約でうかがい知ることができますが、大変興味深いものです。箇条書きにまとめると次の通りです。

- ①市制70周年を機に何らかのものを出版する。
- ②書名は「福岡市史」とし、内容は行政史ではなく

て市政を基本にした社会史で、時期は明治以降、記述の範囲は本市に必要なだけにする。

- ③委員会の開催は、月1回の定例会とする。
- ④資料収集員及び庶務的仕事をする職員をおく必要がある。
- ⑤書き始めたら、干渉はしない。

……
というもので、ここに福岡市史の大概が決定されたことになりました。

福岡市史の刊行が終わった今日から考えると、このときの決定事項は重大な意味を持ったことに気づかされます。順に見ていきましょう。①の「何らかのものを出版する」という決議は何よりの重みを持っています。福岡市のナンバー2である助役が委員長であり、主要な局長・教育長・部長らからなる強力な意思決定機関のことですから、実現性は何よりも大きいと考えられます。周年記念事業であろうとなんであろうと、出版できるということが何よりのことなのです。出版目的が単純明解に示された点にこそ、事業の実現性を強く認識したのだと思います。②の「市政を基本にした社会史」、「時期は明治以降」とされたことは、福岡市史の編集方針を確固たるものにしました。小野の編集方針はあくまでも原始から今日までの全史的なものを構想していたのですが、会議の中では、それにこだわる小野に対し、まず明治編を出版してからということだったのです。会議の雰囲気は多分過去の周年事業のように単発の刊行物で記念事業とすることだったように読み取れますが、小野はこの会議の決定事項を最大限膨らませて市史の編纂に取り組んでゆくのです。

お詫び

「市史だより Fukuoka 13」に掲載の「特集 能古島」の記事に誤りがありました。お詫びして訂正いたします。
P3「能古島マップ【北側】」内 【誤】「E：壇一雄の文学碑」▶【正】「E：壇一雄の文学碑」（2カ所）

表紙の写真：柏原を臨む

【写真：新田岳 (cubicface)】



柏陵高校の屋上から見た西鉄バス柏原営業所前の様子です。今回は柏陵高校のほか、花畑小学校と福翔高校の屋上からも撮影を行いました。高い場所から見ると、多くの屋根の合間を縫って、山からいくつもの尾根が伸び出した様子が印象的でした。周辺を歩けば、公園やため池の緑地、お堂や路傍の祠に至るまで地元の方がきちんと手入れをされていて、町を大切にされていることがわかります。今回も地元の方々には大変お世話になりました。柏原公民館や各学校関係者の方々、また貴重な写真をお貸しいただいた池邊啓明氏に、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

資料所蔵

- 九州歴史資料館【P3：写真②】
- 福岡市埋蔵文化財センター【P3：写真④、⑥】
- 東京大学史料編纂所【P3：写真⑦】

写真提供

- 福岡市埋蔵文化財センター【P3：写真③、⑤、⑥】
- 福岡市博物館【P3：写真④】
- 池邊啓明氏【P5：(上部右)昭和53年、同63年】
- 柏原公民館【P5：上部左】